

守りたい、守られたい

キミに愛を！

春の訪れとともに僕の前に現れた天使。笑ったり、泣いたり、怒ったり、いろんな表情で惑わせるキミ。なぜキミは、僕を夢中にさせるのか？ キミのことが好きでたまらない気持ちを、ことばにして届けたい！

芯の強い呪療士

志乃

ワタシが言われたい

頼りがいのあるお姉さん

名塚佳織 as 志乃

「.hack//SIGN」で昴役を演じた名塚佳織。志乃も、当初は昴と似た人物なのかと思ったそうだ。「でも、昴のように高所からの目線ではなく、しかも、タビーやハセヲを広い心で受け止めるタイプの女性。周りをできる限り支えていきたいというお姉さん的な存在ですね。ただ、オーヴァンには、よきパートナーでいたいという想いが強いかな。」と。現場では私がいちばん年下なんですが、お姉さんキャラクターなので、頑張って演じています(笑)」

猫耳＆猫の手拳術士

タビー

ワタシが言われたい

かまってもらいたい！

豊口めぐみ as タビー

ハセヲに関しては「同じ初心者ということで、同級生としての意識が強い」としながらも、心を寄せているのは「やはり、何といっても志乃」と豊口めぐみは言う。「とにかく、彼には『相手にしてもらいたい！』と常に思っているんじゃないでしょうか。初めてタビーが志乃と会ったときからそういう感じですし。私自身で、同級生からはけっこう頼りがいのあるタイプに思われるんですけど、『実際はそんなでもないよ』と言いたいです(笑)」

TV .hack//Roots

毎週／水

HP▶http://ani.tv/hack_roots/

強さと儚さを併せもつ2人の戦うヒロイン

ヒロイン像というものは、ヒーローに守られる存在であったり、作中におけるアイドル的な役割、もしくは、いわゆる「戦闘のヒロイン」として描かれることが多かった。しかし、昨今では「戦うヒロイン」も目立つようになってきた。それでは、志乃の場合はどうだろうか？ 彼女は、MMORPGのプレイヤー。

「日記」のような「青春映画」

真下耕一●監督

独特の空気感を感じさせる物語・人物描写で、確固たるスタンスをもつ監督・真下耕一。その真下監督が、「.hack//Roots」をどのようにつづっていくのか？　監督のなかのヒロイン像にも迫ってみた

として捉えている。

「ある日、電車に乗っていたら、若い男の子が、ヘッドフォンから音をガンガン漏らしながら隣に座っていたんですよ。内心、腹立たしく思いながらその姿を見ていたんですけど、お年寄りが前に立つと、席をスッと譲ったんですよ。間違ったことをして人に迷惑をかけるけど、そういう条件反射的な行動も取れるタイプ。―ハセヲは、まさにそんなキャラクターですね。内へ内へと沈んでいく『志乃』の前とはまた違います」

とはいえハセヲは、感情をパーッと外へ出す人物というわけでもない。

「ふだんは感情を外へ出そうとして、ためらってしまうタイプですね」

そこが、彼のコミュニケーションにおける不器用さにつながってくる。簡単に言ってしまえば、ハセヲは「素直じゃない」少年なのだ。

また、真下監督の中のヒロイン像についてもうかがった。『Roots』におけるヒロイン。それは、志乃ではなく、タビーなのだという。その理由として、まず彼女が大人側のキャラクターであるということを挙げた。

「オーヴァンや[illegible]というのが、[illegible]

[illegible]

「志乃はオーヴァンだけではなくて、ハセヲにも振り向くわけですよ。そこで、ハセヲ、志乃、オーヴァンという三角関係ができ上がると。一方、同世代の女性であるタビーがいるので、ハセヲ、タビー、志乃という三角関係もでき上がる」

しかしながら、この2つの三角関係には、ベタベタとお互いが寄り添うような雰囲気はなく、むしろ、どこか淡々とした空気さえ漂っている。

「『Roots』は、いかにもドラマな部分ではなく、フラットな部分にスポットを当てていくような作品。それだけにストレートで、よそよそしくない。『Roots』は、いわば『日記』のような青春映画、ですね」

最後に、"時代性"についても聞いてみた。世に氾濫する映画や音楽、小説などは、その当時の社会、世界がどういうものかという時代性がひとつの鍵となっている。アニメもまたしかりで、とりわけ『.hack』は、取り上げている題材の性格からして、常に時代のエッセンスを取り込んでいるコンテンツだ。しかし、真下監督は現実社会の[illegible]を作品で表出することはないという。

「社会情勢を[illegible]。[illegible]

[illegible]いていきたいと思っています」

『Roots』は誰もがつづれる、ありふれた映画のようなもの

前シリーズでは、「.hack//SIGN」「.hack//Liminality」「.hack//黄昏の腕輪伝説」と、アニメにおける「.hack」を手がけてきた真下耕一監督。今回の「.hack//Roots」もまた、真下監督の指揮のもと、制作が進められている。それだけに、前シリーズを引きずってしまう感覚もあったのではないかと思われたが、気持ちの上ではリセットされていると真下監督は語っている。

「スタッフが相当入れ替わっていて、しかも、『SIGN』を観ていた人が参加しているんですよ。だから、シリーズの続編というよりも、『これは新番組なんだ』という感覚が強いですね」

今回のシリーズの主人公・ハセヲ。真下監督は彼を「今どきの男の子」

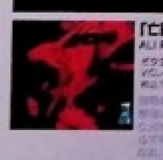
For Artist…

「.hack//Roots」を彩る2組のアーティスト

真下監督は、オープニングを歌うFictionJunction YUUKAの梶浦由記についてこう語っている。「音楽家なんですけど、小説家みたいな方。打ち合わせでも音楽のことではなく、設定とか登場人物とか、そういうことしか話さない。そこから梶浦さんは世界をイメージして音楽にしていく方ですね」。一方、エンディングを歌うALI PROJECTについては「宝野アリカさんは詞を書くように音楽をつくるアーティスト。そのうえ、『亡國覚醒カタルシス』の歌詞が、そこらの青年漫画ロックよりもはるかに過激な内容なので驚かされました。その"毒"がALI PROJECTの魅力なんですよね（笑）」

ALI PROJECT

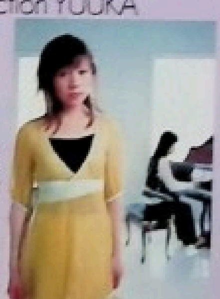




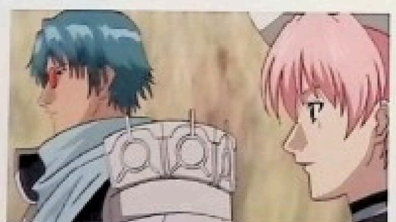
「亡國覚醒カタルシス」
ALI PROJECT
ビクターエンタテインメント／VICL-36089／税込1155円／5月24日発売

FictionJunction YUUKA





「Silly-Go-Round」
FictionJunction YUUKA
ビクターエンタテインメント／VICL-35989／税込1155円／発売中



謎多き人物・オーヴァン。正体がまったくわからない。それだけに、彼のもつ"闇"には興味をそそられるが、志乃はオーヴァンをどう思っているのだろうか？

志乃 with オーヴァン

ハセヲが加入する以前より、「黄昏の旅団」で行動をともにしている2人。お互いがひかれ合ってというよりも、オーヴァンのもつ独特なカリスマに、志乃が引き寄せられているという印象を受ける。2人はリアルの世界でも知り合いのようだが、実際のところはどうなのだろうか……？

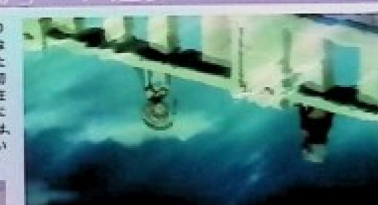


オーヴァンを、そして「黄昏の旅団」を支える志乃。そこには、ギルドメンバーとしての役割以上の気持ちを感じてしまう。ここもまた、ポイントのひとつだろう



志乃 with ハセヲ

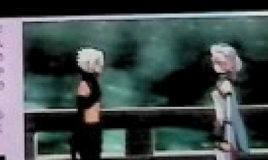
真下監督いわく「学校に転校生が入ってきて、いきなりいじめられてしまう。それで、『チクショウ！　こんな学校、辞めてやる！』と思ったけど、美人教師がいたから踏みとどまった」というのがハセヲと志乃の最初のつながり。この関係性は、2人の間で、以後も潜在的に保ちつづけられていくことになる。志乃は、常にハセヲを優しく包み込む存在なのだ。だが、ハセヲは、自分とのつながりよりも、より深くつながり合っている志乃とオーヴァンの関係を気にすることも。



水面に揺らめくハセヲと志乃の姿。2人の関係もまた、このような揺らめきの中にある。また、この光景には、ある種、[illegible]な味わいもある一方で、どことなくせつなさも感じる



志乃に背を向けて座るハセヲ。何ともムズムズとくるもどかしい姿に、なぁハセヲ、どうして君はそうなんだよぉ！



お互い、まっすぐに見つめ合うハセヲと志乃。このとき、2人の胸中に去来する思いはいったい何であるのだろうか……



ヘタレなハセヲを、志乃はスッと手を差し伸べ、「黄昏の旅団」へと招待する。この瞬間、ハセヲの中の「The World」は意味のあるものへと変わったのだ



人の顔を見てしゃべることができない、と言われてしまったハセヲ。少しずつオーヴァンと志乃の存在を意識しつつある

真下耕一
Koichi Mashimo
アニメーション監督。ビィートレイン株式会社代表取締役。『.hack//SIGN』をはじめとする『.hack』プロジェクトのアニメ作品の監督。『NOIR』『MADLAX』『ツバサ・クロニクル』など、さまざまな作品を手がけている

original illustration SATOSHI OHSAWA